

Title	身体の社会的愉しみ：社会学者・岡原正幸のライフストーリー
Sub Title	The social pleasure of the body : a life story of sociologist Masayuki Okahara
Author	後藤, 一樹(Goto, Kazuki)
Publisher	三田哲學會
Publication year	2025
Jtitle	哲學 (Philosophy). No.154 (2025. 3) ,p.49- 87
JaLC DOI	
Abstract	This is a life story interview with Professor Masayuki Okahara by the author as his disciple. Prof. Okahara has had asthma since he was a child. For him, the body has been a stranger that is not controllable and something to be found or created by himself every day. The experience at Keio Futsubu School was so important because it was the first time that his body could be lively in a social community. When he was a high school student, he encountered “the underground theater” that taught him the way of body expressions as words. The actors’ self-reflexive bodies represented on stage were just beautiful. Through some conflicts with his mother, he went his own way. He joined a student movement at the Hiyoshi campus. And then, he threw himself into the activity of assisting disabled persons who were going to be independent from home and facilities. At the same time, his method of Sociology was born. This is a story about the spring of his life.
Notes	特集：岡原正幸君・岡田あおい君・三尾裕子君退職記念号
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000154-0049

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

身体の社会的愉しみ

——社会学者・岡原正幸のライフストーリー——

後 藤 一 樹*

The Social Pleasure of the Body A Life Story of Sociologist Masayuki Okahara

Kazuki Goto

This is a life story interview with Professor Masayuki Okahara by the author as his disciple.

Prof. Okahara has had asthma since he was a child. For him, the body has been a stranger that is not controllable and something to be found or created by himself every day.

The experience at Keio Futsubu School was so important because it was the first time that his body could be lively in a social community.

When he was a high school student, he encountered “the underground theater” that taught him the way of body expressions as words. The actors’ self-reflexive bodies represented on stage were just beautiful.

Through some conflicts with his mother, he went his own way. He joined a student movement at the Hiyoshi campus. And then, he threw himself into the activity of assisting disabled persons who were going to be independent from home and facilities. At the same time, his method of Sociology was born.

This is a story about the spring of his life.

* 千葉商科大学政策情報学部准教授

はじめに

本稿は、社会学者の岡原正幸先生に、弟子の筆者がおこなったライフストーリー・インタビューである。

岡原正幸さんは、1957年に生まれ、東京都世田谷区で育った。

幼少期から喘息を抱えていた岡原さんにとって、身体とは、ひとりの他者であった。それはコントロールできない異文化であり、常に対話を通してつくられ、発見されうるなにかだった。

慶應義塾普通部での経験は、岡原さんにとって重要な転機となった。普通部での自由な教育環境は、規範的な社会空間に縛られていた彼の身体性に、初めて肯定的な意味を与えた。

高校時代にアングラ演劇に出会った岡原さんは、身体という言葉にのめり込んでいく。自己再帰的に上演される役者たちの身体は、衝撃的で美しくかった。

母親との葛藤を経ながらも、自らの道を模索する岡原さんは、やがて学生運動や社会問題に関わりを持ち、障害者の自立支援活動を通して、独自の社会学と身体の社会的技法を実践していく。

これは、岡原正幸さんの青春の物語である。

本稿では、以上のような内容のライフストーリー・インタビューを、以下の節立てによって展開する。

1. 喘息を抱えて——身体という他者
2. 普通部の饗宴——解きほぐされる身体
3. アングラ演劇の衝撃——自己再帰の身体の見定め
4. バリケードの十日間——若き血と政治的身体
5. 喜ばしき身体——障害者の自立と岡原社会学の誕生

なお、岡原さんご本人には原稿を確認いただき、必要な箇所には加筆修正

を施していただいた。

また、ライフストーリー・インタビューの表記に関しては、小倉康嗣『高齢化社会と日本人の生き方——岐路に立つ現代中年のライフストーリー』（慶應義塾大学出版会，2006 年）を参考にした。インタビュー中の（——）は、同時発話的な相手の言明やうなずきを示している。

1. 喘息を抱えて——身体という他者

———著作のなかですでに喘息の経験は語られているんですけど¹、改めてですね、喘息の気が出てきたのを自覚して、それがどう少年時代に及ぼしていたのかっていうのを思い出すと、どんな感じになるのでしょうか。

（岡原）喘息はやっぱりね、いろんな活動ができないというもので、さらに言えば、発作を起こさないようにコントロールすることが大事で、自己管理っていうのをかなり強く要求されるわけ、小学生でも、薬を自分で飲む、対処するっていう管理。

よく効く薬を「発作が出たらすぐ使っていい」とは言われてなくて、一日に何回とか決められていて、それ以上超えては使えない、「だめだよ」って言われる。とにかく「自分で管理しなさい」と、小さい頃からそれを言われる。だから、発作があっても我慢してしまうっていう、薬はすぐには使わないっていうようなことはあります。

ただ、その薬の使い方については、親に一方では依存する。親が「飲んでいい」って言ったら、すぐ使えるので、親の許可っていうものがやっぱり必ず必要になるようなものとして、自分のなかにはあったような気がする。逆に言うと、親が許可しない、「一時間前に使ったから今だめだ」って言われたりすれば、今苦しいのに使えないということで、その苦しんでる

状態を親のせいにもするわけですよ、そこはアンビバレンツな感じだったけど、今考えれば、でも、親を無視して薬をバンバン飲むってこともなかったの、そういう意味では、優等生的な対応を親にはしてたんだと思うけど、

———喘息の症状が出始めた時期と、それがだいたいゆるやかに克服されていく時期はいつくらいでしょうか？

(岡原) 症状が出始めたのは幼稚園のときだから、うん、そうですね、それでも一応いろんな専門医のところに行くということで、ちょうど父親の会社もうまく行き始めたところなので、自家用車というか、それも運転手付きの自家用車で(笑い)、病院にそのまま行くっていう経験を何度もしてます。皇居の近くの九段坂っていうと、K 病院っていう、今でもあるけど、その病院に小児アレルギー科の権威で N さんっていう先生がいて、その先生にかかって、いくつかその時代の治療法を試したっていうことになる。

ただやっぱり、それでもですね、結局、小学校から中学校、高校ぐらいまでは状態がかなり悪くなることがある。走ったり、プールで呼吸が乱れるとか、あるいは風邪をひくとかになると、それが誘因になって喘息が出てくる。季節の変わり目にも出やすいということで、そんな状況は大学、大学院においてもそうでした。思えば、大学院時代もけっこう喘息で授業を休んだりもしていました。もうそうになると、それがいつ消えたのかって、なんとなくとしか言えないな。

ただ、大学卒業して一年間ドイツに行ったんですけど、ドイツでは全く発作が出なかったっていう(——ええええ！ ふふふ)。奇跡の一年ってあるんだよ(笑い)。その説明としては、たとえばドイツの気候であるとか、いろんなこと言われる。「喘息児は親への依存心がすごい強いから、それ

をなんとかせよ」みたいなことも言われていたけど、そういった意味ではドイツで初めて一人暮らし、留学する前は色々危惧してたんですけど、結局は、発作止めの薬とか持って行って、一切使わずに終わったっていうことになる。

それから帰ってきてから、なんとなく意識せずにすむようになった。ただ、今でも発作止めの薬は常にかバンに入ってますよね、うん。

———ドイツの話は面白いですね、それはすごく。どちらかという、咳が止まらなくなるわけですか？

(岡原) 呼吸ができなくなるんですよ。気道が狭くなっちゃうので、息を吸おうとしてもなかなか入ってこない。なので、すごい喘^{ぜいめい}鳴、もう「ゼイゼイ」っていうふうな感じで呼吸しないと苦しくなっちゃうっていう。

———それは相当……要は、窒息っていうかね、酸素が足りなくなるっていう（——そうです、はい）。必死に喘息に向き合うみたいな感じで、相当苦しい。

(岡原) そうなんです、苦しいです、はい。だいたい夜や明け方に出るので、寝れない。明日は学校なのに寝れないというのは、けっこう大変な経験でした。

———毎日起こるわけですか？ 調子が悪いと。

(岡原) 調子が悪いときは、ほぼほぼ毎日出たりするので、もう寝るのが嫌だっていう。横になるのが怖いみたいな感じの時もあって。

———1日でも、何回も起こる？

(岡原) 発作が起きて、一応にか薬で対処すると、あとは静かにしてれば、とりあえずおさまったと思うけどね。おさまらないときは、酸素ボンベや救急搬送です。

———そっか、活動すると出てくるわけですね？

(岡原) そうのこと。呼吸が乱れると、ということだね。

———寝るときに出るっていうのは？ 呼吸を自分でコントロールできなくなると？

(岡原) そうですね、副交感神経とかの話で、ちょっとそういったことが出やすくなるっていう。

———たとえば授業中も、そういう発作になったりするわけですか？ 小学校のとき。

(岡原) そう、体育とかね、激しい運動があると、当然のように発作。だから、もっぱら水泳は休んでた、喘息で。

———咳は出ないんですか？

(岡原) 咳がきっかけにはなるんですけど、もう喘息の発作の場合は、ゼイゼイ言って、咳もでない。

———まわりの人に気づかれずに、けっこう一人で苦しむことも？

(岡原) そういう意味ではね、そういうことも。小さな発作とかの場合は、うん。

———今の話を聞いていると、小学生の頃から、自分自身がコントロールできない一人の他人みたいな（——そうですね）。なんかこう、もう一人自分がいるっていう、オート・エスノグラフィ的なまなざしって、いやおうにでもあったのかなと思ったんですけど。

(岡原) そうね、自分の中に全くの他者がいるっていう感覚ではありますよね。

———そこに向き合うっていうかね、コントロールしきれないみたいな（——うん、そう）。そこでの共存っていうのは結局……できたのかできなかったのかっていうか、どう折り合っていたのかっていうか、もう一人の他人とどう生きてこられたのか。

(岡原) 発作が起きる自分、発作的身体を持った自分っていうのは、もう全くの他者だし、コントロールできないので、とにかくなだめて、出てこないようにするっていうことだね。これが僕のとった対策。

でも、一般によく言われるのは、逆に、体を強くするっていう人たち。喘息の子どもに対して医者がすすめるのは、乾布摩擦であるとか、呼吸法のコントロールだとか、多くの人がやるのは水泳ね。水泳を習わせるっていうのは世界中で言われていて、なかにはそれでオリンピックで金メダルとった東ドイツの選手もいたりして。だから、親が厳しく、子どもが嫌がるけどそれをやらせるみたいなのに比べると、うちは、ま、乾布摩擦を

ちょっとだけやったような気がするんだけど、僕が嫌がったら、すぐ辞めたっていう気がするんですよ（笑い）。「そんなに嫌なら、やめていいよ」みたいな。その場合は、母親もそうだったと思います、はい。

学校の勉強については厳しかったと思うけど、喘息が出る僕に対してすごく優しいので……そう、母との関係においては、まあ、喘息っていうのは、母親との関係を切り結ぶ一つ材料になっていたというふうには思うけどね。

———喘息発作が出たときは、母親は優しい。

（岡原）ええ、そうそう。優しい母親がほしいときは発作を出せばいい、極端に言えばね。そういった感覚がなかったといえは嘘になるっていう感じかな、うん。

———のちのち、岡原青年が障害者支援のボランティアとかですね、社会学の研究とか、あるいは感情とか身体をですね、探究していくわけですが、なにか、その原体験として、自分のなかにそういう完全に統御できない身体性とか、感情の波とかですね、いつ爆発するかわかんないものを常に、常に抱え込んでいたっていうところの意味って、けっこう大きいんですよね。

（岡原）そうですね。体については、他者としての体というか、他者である体っていうか、コントロールとかトレーニングの対象にならない異文化、コミュニケーションできないもの、異物という感じがあった。

アスリートは自分の体を鍛え、鍛えるというかたちで自分の体とコミュニケーションしてるわけ、そして体はちゃんと答えてくれてたりする、記録が向上したり、タイムが下がったり。僕の場合も治療は体への働きかけ

ですけど、減感作療法もそんなに効いてはいなくて、僕の実感としては効いてなかったと思うんですよね²。薬品の発作止め、気管支拡張剤のほうで喘息の発作はやわらぐので。

なので、圧倒的な他者ってというか、コミュニケーションできない他者、異文化としての他者を自分のなかに抱え込んでいただろうことは、推察できる。

——うん。いま聞いていると、ディシプリンできない身体っていうか（——はい）。近代社会のなかで身体を統御する訓練（——うんうん）、教育もそうですけど（——はい）、医学もそうですけど、そういったものと違い、ディシプリンしきれないって意味で、その枠組みから常にこう、こぼれてしまう……（——そうね）身体、感情。そういう意味で、そこでもう、近代の図式がいやおうなくひっくり返っていて。

（岡原）そう、そうだと思う。うん、僕の意識のなかで、そうですね。

2. 普通部の饗宴——解きほぐされる身体

——でも一方で、学校では、まあ、勉強ができちゃって、高学年になって受験も、母親のすすめもあって進んでですね。そこらへんでは、一方ではですね、ディシプリン、うまく進んでるってこともあって（——そうだね、はい）、そこらへんから、岡原先生らしさがですね、出てきてますけど。慶應義塾普通部に入って、ある種、「慶応の教育」というものに出会うわけですけど、そこはやっぱり衝撃大きかったですかね？

（岡原）そうです、その自由度はやっぱり。中学の先生が文部省とか教育

委員会とは関係なく授業をしているっていうことだったので、そのときは、それがどういう意味なのかはわからないけど、ただただ、自由じゃないですか（笑い）。ちょっとびっくりするような、少なくとも公立の小学校にある常識っていうのは、全てそこにはなかったっていう。それはね、僕にとってはプラスというか、すごく喜ばしいものとして映った。

これ、たぶんね、違和感ではなく、それを喜ばしいものとして受け入れられたのは、公立の小学校でやっていたディシプリンとの差。小学校では、僕は喘息という他者を持っていたがゆえに、水泳もできないし、運動会もあんまり好きじゃないし、特に林間学校とか、泊りの授業についても戦々恐々なんですよ。発作が出たら大変だし、発作が出てくると、隣には友達が寝ているわけじゃないですか。ある意味、行きたくもない。

公立の小学校にあるディシプリンに違和感を持っていた僕からすると、全くそういうものを意に介さない教育空間を、それぞれ何人かの先生が、勝手にやってる姿っていうのは、すごく共感というか、喜ばしいものに映りましたよね、もちろん、はははは（笑い）。

———そうですね。だから喘息って、爆弾みたいなもんで（——うんうん）、いつ爆発するかもわからないし（——そうそう）、他者の規律を乱してしまうかもしれないっていう、変な後ろめたさみたいな（——うん、うん）、そういう、なにか爆弾を抱えている自分みたいな感覚も、慶応の教育のなかで変化していくわけですか？

（岡原）そうですね、爆弾を抱えていてもいいっていうこと（——ほお）。その爆弾を抱えていることの怖さって、自分個人の身体的なものとともに、もう一つ、やっぱり自分が社会的存在として生きてるので、友達はどうしてるかとか、クラスの常識ではどうかとか、担任はどう言うかとか、そういったものがすべて重なっているわけですよね。だから身体的な物理

的な苦しさは中学においても変わらないんだけど、それにさらに覆いかぶさってきた常識的な社会っていうのが、そこにはなかったっていう……（笑い）。

たとえば、あの……。 （笑い）、お弁当持っていくんだけど、そこにキャンプ用のコンロみたいなもの持ってきて、それで調理するやつがいるとかさ（笑い）。自分のランチを教室で調理してんだからさ、「なんだよ、こいつは！」みたいに思うわけじゃん。今まで給食でなんの差もなかった、好き嫌いしかなくようなところで、〈食べる〉という一つの昼休みの行為自体が、もう多種多様なわけ！ それで、それが許されてるわけです。それはね、すごくもう、僕にとっては面白かったですよ。

国語の授業で T さんって、その後、経済学部で国文学の先生になったんですけど、その T さんは、もう授業では……天気がいいと、とにかく外に出てやろうっていうね（笑い）。「今日、天気いいから、外に出ましょう」って（笑い）。出るんだけど、出るとノートなんてとれないわけですよ。生徒は一応ノート持っていくんだけど、机のある教室とは違って、とれないじゃないですか。その形式は、ちょうど僕が「三田の家」で授業やっていたときと同じで、教室だったらできることが、できなくなる³。だからこそ、新しいことが生まれる。それは、T さんがそこまで考えていたかどうかかわかんないけど、僕ら中学一年生からすると、天気のいい日はノートもとらずに先生の話聞くっていう。ノートをとらずに先生の話聞くと、聞こえ方とか自分の聞き取り方が変わるわけです、やっぱり。

あるいは、試験やなんかも全然違っていて、地理の A 先生、地理の一学期の問題は、ただ一言、「新疆ウイグル自治区について書け」なんだよ。「え！ なにこれ！」みたいな。そしたら……。 （笑い）、設問に関して説明しに来て、「いや、とにかくたくさん書けば、点はどんどん増えて、僕の試験には満点はないから」って言う。だからもう、新疆ウイグル自治区はどの位置にあり、気候はどうであり、産業はどうであり、どういう人が生

き、中国のなかでどういうふうな自治の立場なのか、とにかく知っていることを書かなくちゃいけなくて、というような試験であったり。

あとは、これは僕も大学ではよくやっていたんですけど、生徒に作らせる、試験問題も。それは公民の I 先生。

それから、僕は歴史研究会だったんですけど、歴史研究会の部長が K さんっていう先生なんだけど、K さんは中学 1 年の歴史を担当しているんですけど、一年間かけてなにをしたかっていうと、「北条氏の荘園制度」について論じた。それだけなんですよ。本当にそれだけなんだよ！ 頼朝とか、もう出てこないんだよ、本当に荘園制度……（笑い）。それを中学 1 年に堂々とやっちゃうんだよ。その K さんも日吉の一般教養で教えていたことがあって、僕がちょうど経済学部に入ったときに、K さんが授業を持っていたんで、わざわざ覗きに行ったら、同じこと話してるわけよ、僕らの中学と。「同じノートじゃねえか、これは！」みたいな、はっはっは（笑い）。

———文部省の、この範囲教えなさいみたいなことは？

（岡原）一切無視だね、一切無視。数学の先生も、Y さんという、この人は文部省の教科書の共著者ですけど、自分で、「教科書はね、中学生だから、みんなもらえるんだけど、僕の書いたこの教科書は使わないから」って、高校生用の数学なんかというのを配って（笑い）、それで授業始めるんだもん。「そんなもんだろうな……？」っていう。

とにかく常識を、慶応に長くいて揺さぶられるけど、やっぱり一番常識を覆されたのは、この普通部の数年間。

幾何の K 先生にいたっては、毎回、最初は瞑想なんだよ（——へえ）。なんのためだか、瞑想して（笑い）。それで一回、今でも覚えているんだけど、僕のクラスの N 君っていう人が、消しゴムを落としたんだよね、授業

中に、それで、後ろにいる S 君に「取ってよ」って言っただけなんだよ。そうしたら、その K 先生が授業を全てストップして、N 君に、「なぜ自分の消しゴムが落ちて、それを後ろの S 君に『取ってくれ』って言ったんですか？」っていう問いを始めて、45 分の授業を全てそれに使ったっていう。二人にどう思ったか、周囲の人にどう思ったかって聞くという。幾何の授業なんだよ？（笑い）。そういう人ばかりで……（笑い）。

———45 分使って、結局、なんで消しゴムが落ちて、それを拾ってもらおうとしたのかっていうところで、どういう話になったんですか？

（岡原）やあね、詳しくはもう覚えてないけどね。あっけにとられてるから、「どうなの？ なんでこれ？」。自分の落とした消しゴムは、普通の人間だと、自分で拾いなさいっていうね、そういう規則があって、その規則に違反したから、なにか問題になってるのかっていったら……そうじゃないわけよ。そういう話じゃないんだよ、全然。これがなにかわからなかった。わかんないな。

———はははは（笑い）。禅問答みたいな。

（岡原）そうなんですよ！ 瞑想する先生だからね、もう本当に瞑想した。そう、だから、「ええ！？」みたいな。

———小学校とのつながりで言うと、たとえば喘息児であることに対する、あからさまではないにしても、ある種、非言語化された差別というか、なんか違うんじゃないかみたいなのがあったのか。それが普通部でどう変わったのか、そこらへんはどうですか。

(岡原) たぶん、それはあまり感じない。ただ、自分のほうで発作が出たらどうかなっちゃう。自分の体だけじゃなくて、今授業をやっているので、授業の邪魔になるんじゃないとか、そういったことも小学校ではいろいろ考えてしまう、重荷ですかね。その前提には、やっぱり教室という世界の統一された社会秩序が重んじられていたわけだよ。

ところが普通部になると、そもそもその社会秩序がバラバラで、どんなものでも可能であるというふうになると、そういうことはなかったけど、発作が起きても、別にそれはそれで授業になる、たぶんなるっていう(笑い)。僕が喘息発作で倒れる、それがもう授業のネタになっちゃうような、そういうふうな安心感っていうか、内側にいるっていう安心感はあるよね。

———すごいな！ それはすごく大きいですね。社会的な秩序の変容が、もう起こったわけですね（——そうそうそう）。そうすると、自己の成り立ちや（——ええ、ええ、ええ）、他者としての自己が変わったっていう経験は（——そういうことだよな）、とても社会学的でしたね。

(岡原) 非常に社会学的な経験をしたと思う。自分の発作はあったとしても、それを受け入れる社会によって、全然、その意味するところが違ってくるっていう。まあ、ラベリング・セオリーというか、構築主義というか、そのまんまですよな。

———思春期ですもんね、12歳から15歳ぐらいまでの。すごく深いところに影響を及ぼした学園生活だったんでしょうね。他方でたしか、『ホモ・アフェクトス』でしたっけ、十代前半ぐらいの詩が載っていて、「親も死んでしまえばいい」みたいな⁴。あれが中学時代でしたっけ？

(岡原) 作ったのは、ええと、もう中三ぐらいの詩だと思う。

———中三ぐらいですよ。ああいう詩を書いたのは、あれはなんなんですかね、反抗期ってやつですか（——ははははは）、それとも……

(岡原) 反抗期といえば、反抗期だね（笑い）。

———親との関係が、特に、母親に対するあれがあったというか？

(岡原) 親に対する反抗はその後もずっと続くので、それはあったと思います。小学校のときは成績良かったんですけど、普通部に入ってもそれなりにやっぱり勉強……結局、勉強するハビトゥスをすごく植え付けられた人間なんで、勉強すれば成績がとれるたぐいにおいては、成績いいんですよ。

そうするとやっぱり、あの当時の普通部でも、これだけ成績良ければ、高校行って、医学部行けると、それを保護者会で聞いてしまった親は、安定した職業、単なる安定じゃなくて、高額の安定した職業として医者考えたわけです。単に三井とか三菱に勤めて、銀行かなんかで安定してっていう話どころか、それ以上の収入を得る、さらに定年もなく働ける、いい職業だとして考えていない。社会的意義とか、そんなの多分うちの親はあんまり考えていないし、親戚に医者がいるわけではないから、どんなに業務が大変で、さらにそれが大学病院とか、病院に勤める勤務医だとしたら、どんだけ大変かなんていうのは知らなかったの。なので、中学になってからは、勉強へのプレッシャーはさらに強くなるんですよ。医学部を念頭についていう話で進む。

ただ、もともと喘息なので、外でいろんな遊びをしようっていうタイプではなかったんで、友達とつるんでなにかやるっていうのは、どちらかと

いうと機会としては少なかったと思います。友達の家泊まりに行ったり、友達がうちに泊まりに来たりってのは、けっこう頻繁にあったけど、それ以上みんなで街中で遊ぶみたいなのは全然なかったし。

そんな感じだったから、「成績を落とすな、上げろ」っていうプレッシャーへの反感も、あの詩のなかにはあるだろう。で、親が描いている普通の社会とか喜ばしい社会、豊かな社会、幸せになれる社会っていうのは、「いったいなんだよ、それは！」っていう、そういうのが言いたかったことだと思うけどね。

3. アングラ演劇の衝撃——自己再帰的身体の目覚め

——普通部が日吉で、そのまま高校（——高校も日吉）になりまして、僕のあずかり知らぬ世界ですけど、塾高出身は何人も見てきたけど、塾高的世界っていうか、今言ったように、外でつるんで遊ぶ連中もいれば、自分の関心を突き詰めて（——まあ、そうね、そうなるね）、いろいろけっこう多様なね（——そうですね、はい）ほうかと思うんですけど、岡原青年はどんな高校時代を？

（岡原）一つは、勉強はまあ、ちゃんとしてたと思うんだけど、やっぱ好きになったのは……映画はよく小学校の頃から見てたんで、『007』とか、特に『クレージーキャッツ』ね、植木等やなんかが好きだったね。映画が好きだったんだけど、高校になって今度は……

普通部のときに東横線を通うと、代官山に行く前に天井桟敷が見えるんですよ、寺山修司の、はい。昔は天井桟敷のアトリエがあそこにあって、ピエロみたいな大きな顔のやつがファサードにあるので、東横線乗って、すぐ見えるんですよ（——車窓から見える？）。そう、車窓から見えるんで

す、はい（——へええ）。そういう時代があって、で、まあ、「寺山修司ってどんな人かな」とか思っているうちに、いろんなことが……唐十郎であるとか、当時のアングラと呼ばれた演劇についてのいろんなものが情報として、こっちの感度をあげると、いろいろ入って来るわけで、いろんなことがそこでは試されていて、それも不思議な世界で……ま、反秩序といえ反秩序なものが横行していたので、僕的には共感、「これは面白い世界だな」というふうに思いました。それは高校時代かな。

———実際にアングラ演劇の観劇ですか（——そうですね、観に行ったり）。放課後に行ったりとかするわけですね。17歳だと、1974年？（——そうだな、そのぐらいのときは）。印象に残った舞台とかありましたか？

（岡原）天井桟敷は、一方で舞踏と近いものがあって、ほんとうに自分の体、裸の体でねじ曲げるようなかたちで、舞台上でバタバタするっていうのがあったりして、それはもう、もう全然違うというか、言葉以外で表わされる。寺山自身が見世物小屋であるとか、いろんなことに関心があって、彼は詩人でもあるけど、その詩の言葉よりも、体の言葉みたいな、〈身体の言葉〉っていうのをかなり意識して芝居作りしてたんで、それはまともにグツときますよね。唐十郎だって、ああいうふうな詩的・文学的な本を書いてるけど、基本はやっぱり〈肉体の演劇〉だったりますので。

劇団四季であるとか文学座であるとか、古典的な劇団がある意味、体っていうものをゼロにしているっていうか。そもそも、ただヨーロッパ人になるために、金髪のカツラをすとか、鼻に付け物をすとか、つけまつげをすとか、そういったものと違う体がアングラですよね。演劇の舞台の上では体は常にあるけれども、少なくとも新劇とか古典的な芝居でやっていた体の用法とは違っていて、唐十郎もそうだし、天井桟敷もそうだし、さらに並び立つ、鈴木忠志っていう早稲田小劇場、これも演技の仕方

自体も全く違うものを考案してやっていたので、やっぱり、僕にとってはすごい、〈からだ〉っていうのが印象に残ってます。

それと同時に、今も霜田誠二さんと一緒にやっている、パフォーマンス・アートなんですけど、これも基本、行為の芸術、体の芸術、ボディ・アートじゃないですか。それで当時、ヨーゼフ・ボイスであるとか、そういったものを見聞きし勉強する高校時代を送っていたので、やっぱり〈からだ〉にすごい関心があったみたいですね、いま自分で話していて思います。

——それはなぜでしょうかね、それはどっから来ている？

(岡原) 今日の話で言うならば、自由にならない体を引きずっていた自分にとっては、そこに提示されている体っていうのが、ある意味、自由にならない体を舞台に乗せるっていう、ちょっと不思議な感じだったかな(——ああ、なるほどね)。発作を発作として舞台に乗せるっていう感じで、発作を起こさずに消して、ちゃんとした体で演技しようという態度とは、ちょっと違うものを感じたっていう。そのまんま……あの汚い、臭い、そのままの体を舞台にするって感じがしたので、すごく共感した。それまで、演劇もそんなに好きだったわけじゃないので、きれいな演劇は、で、やっぱり彼らを見てると、「これはすごいな」というふうに思った記憶はありますね。

——僕も寺山好きなんですけど、巨大な風船のなかに入った人が出てきたりして、ふつうに歩けないみたいな、そういう身体の不自由な存在がそこにただいるみたいなね。

(岡原) そうそう、そうそう。もうテーマとしてまだ、その、フリークと呼

ばれる人たちをテーマにしているといえばテーマにしていたりするので、そこは、

———その頃の天井桟敷って、本当に、寺山修司がまだ存命で、彼が演出していたんですか？

(岡原) 全然そうで、彼がやったやつのは最後は、ドイツに留学に行く前と、ドイツから帰ってきて観たのが多分、最後の 82 年ぐらいか。

———へええ！ 寺山修司の演劇が見れたってということ？

(岡原) そうそう。ただ、僕としては、実はもっと引き寄せられるのは、僕の小学校時代の寺山のアクション。書簡演劇であるとか、寺山はいろんなことをやっていて、これも、演劇という制度自体をひっくり返すもので、入ってきた観客に暴力的とは言わないけれども、それに近いかたちで拘束するとか、いろんなことを彼はやっていて、ヨーロッパでも、それがまた、僕にはもう「これはすげえな……」と。

その頃のアンガラ演劇は、唐十郎が花園神社で赤いテントでやるのもそうだし、天井桟敷もそうだけど、劇場というオーソドックスな場所を離れて、演劇という制度を批判しつつ批評しつつ演劇をするっていう、自己再帰的なものの一つだった。僕にとっては、〈自己再帰性〉っていうことは、やっぱりこれは、すごく大事な言葉ですよ。

喘息も自己再帰的なんで、発作が出るかもしれないというふうに、自分が自分について判断する、それが実は発作を招く可能性でもあったりして、常に自己再帰的だった。

それで、寺山修司やなにかの芝居もそうだし、その時代の演劇とかアートも自己再帰的なもの。ポストモダンって呼ばれるのはもう少し後だけ

ど、その萌芽はここらへんでたくさん出ている。今でも僕は……自己再帰的でないものはあんまり評価しないっていうか。

———なるほど。新宿の花園神社の唐十郎の演劇っていうのは、どういうものだったんですか？

(岡原) テントのなかでチャンバラみたいなこともあるんだけど、唐十郎はやっぱり物書きというか、彼の書いたものを読めば、あれもすごい綺麗な……綺麗っていうか、その作品自体の美しさ、世界は美しいんですよ。それを本当に、あのう、汗と泥でまみれた体を持った役者たちが、当時で言うと根津甚八であるとか、人形師になった四谷シモンであるとか、李麗仙であるとか、そういった人たちが演じるんですね。さらに、唐十郎のところにいた磨赤兒は、今度は大駱駝艦っていう暗黒舞踏の劇団をつくるんですけど、磨赤兒にせよ、とにかく体の使い方がちょっと無鉄砲な感じで、観客もびしょ濡れになっちゃうし、なんか、とんでもないんですよ。

美しさっていうのは、花園神社のテントで見たときの美しさ。最後はフィナーレみたいなのが必ずあるんだけど、フィナーレになるとテント開けるんですよ！ そうすると、舞台の奥に花園神社が見えるわけ。テントのなかの世界にいたわれわれ観客とその作品が、こう、夜の花園神社のなかでうまく溶け合って、なにかすごい世界が、「あっ！」っていう。今思い出しても、すごいですね。

4. バリケードの十日間——若き血と政治的身体

———自己再帰性の話が出ましたが、当時 70 年代で、オイルショックとかもあったでしょうけれども、ある程度日本が豊かになって、「この

まま本当に豊かでいいのか」みたいな、消費社会になって、なにかそういう、「この秩序が嘘なんじゃないか」みたいな、そういうまなざしって、青年心にも芽生えたりしました？

(岡原) いや、それが嘘だっていうよりは、その豊かさっていうのは、ごく一部の人の豊かさであって、豊かでない人は日本にたくさんいた、今よりもたくさんいたんだと、僕は思う。そういう意味では、もう総中流とかいうふうに言われていたけど、格差は激しかったと僕は思うんですけど、そのなかで、大学生はみな豊かなほうに入るわけです。だから、60年代の大学闘争にもあったように、やっぱり自己否定っていうか、「豊かな恵まれた自分たちはこのままでいいのか」っていうのは、僕の場合は明らかに引きずってましたよね、はい。

それが、慶応で最後の学生ストライキを日吉でやったときの自分の議論で、各教室に回ってアジ演説をする、「学生大会、今度やりますよ、ストライキのために」。そのときにやっぱり必ず言っていたのは、「僕らはいろんな意味で非常に恵まれている」と、「まして慶応大学である」と、「その恵まれ方は半端なく、卒業後もかなり約束されて恵まれている」。で、「それでいいのか？」っていう問い返しを多分していたので、そのときはもちろん、時代的にはたとえばベトナム戦争とか、反米反帝、そういったものを出す時代ではないんですけど、障害を持った人であるとか、様々に差別されている人たちのことは関心があったので、「被差別者をそのままにしておいて、われわれだけいい生活をしていいのか」っていうのは、20歳ぐらいの僕にはすごく強かったですよね。

———20歳だと、1976年？（——そう、76年）。その頃にストライキ闘争ってあったんですか？

(岡原) 1977 年に、商学部で不正入試事件っていうのがあったんですよ。入試問題が外に流されたということを、週刊誌にすっぱ抜かれた。週刊誌の記事はなにを書いたかっていうと、その問題を手にしたのは誰かっていうことで、それがですね、日本のフィクサー K の親戚筋だという。慶応は右翼だとかいろいろ言われていた、少なくとも左翼とは全く関係ない大学であるかのように、生協があるのも変だろうと言われていたような、そんな雰囲気の中かで、もろにその根幹ともいえるようなフィクサーの血縁の受験のためについていうふうに書かれていて、「これ、どういうことなんだ？」っていうわけです。

学生自治会が当時はまだあったので、とりあえず石川塾長に……石川塾長もなったばかりなんで、なんも知らないだろうけど（笑い）、そもそもその入試のときは石川さん塾長じゃないしね（笑い）。当時の僕らにとっては、塾長は塾長。「石川忠雄、出てこい」という、「説明しろ」という、石川忠雄塾長への大衆団交を第一要求として、それが満たされなければストライキを行う、日吉キャンパスの閉鎖っていう。それが、学生大会を開いて多数決で可決されるわけ。十日間のストライキが決まる。日吉キャンパス、十日間ロックアウト。学生ストライキというのは、学生が授業に出てこないボイコット、と同時に、教員がキャンパスに入るのを防ぐロックアウト、この二つからなっているわけですよ。大学のキャンパス自体は、もう解放区にするっていう。

——それは、実際に行われたと？

(岡原) そうそう。それが、1977 年の 7 月の頭ぐらいです。

——そのとき、岡原先生は大学何年生で、どういう役割を？

(岡原) 経済学部 の 2 年生で、ストライキ実行委員。

———実行委員 (笑い)。じゃあ、かなりその中枢にいたってことですね。

(岡原) そうですね。少なくとも、各教室、みんなが語学を受けている教室に行って、「かくかくしかじかであって、ストライキを念頭においての学生大会を開催しますよ」ということをメインに、自分の主張をしていくわけ。

担当の教員に、「そういう話なんで、時間ください」っていうふうをお願いするところからスタートするんだけど、ここがまた慶應義塾、けっこう賛同する先生が多かったんですよ。「いや、もう全部の時間使いなさい」とかね、そんな喋りたくないのに (笑い)。あるいは、体育科の先生なんてのは、僕からすると学生運動否定の人が多いかなと思ったら、体育科の先生が、「今回のことは許されないので、君たちには頑張ってもらいたい」と、すごく押してくれたり。学生部の職員の人も、右翼団体が銀杏並木を突破しに来て不埒な左翼学生を拉致するっていう情報が入ったっていうのを、僕らに伝えてくれて、「みんな、なるべく教室のほうに行ってくれ」と、「キャンパス内には入らせないようにする」とかね、僕らの味方なんですよ。だから、「すげえなあ」と思って、「もう、慶應義塾、みんな味方だ」みたいな。

かといって、敵もいますよ、敵 (笑い)。今でいうと協生館ですけど、あそこにプールがあったんですけど、屋外のプール、場所が離れていて守り切れなくて、授業をやられてしまいました。何人かの学生ももちろん、そこで泳いでいてね。こちらからは「やめろ」とか (笑い)、「ストライキ中だ」とか言って、水泳の授業妨害したり。

それからね、ドイツ語の K 先生。僕、経済学部のドイツ語の授業、その

先生だったんで、よく知ってたんですけど、僕らがロックアウトしてるんですよ、椅子と机でバリケードを張ってね、通路は一つあるんだけど、そこにK先生が来るわけ、で、「みなさん方の主張は、わかります。ただし、私は教員です。教員は、決められた曜日・時限に教室に立つべきです。みなさん方が授業に出ないということはわかっています。でも、私は立ちます」って、気迫がすごくて、「どうぞ」っていう（笑）。そういう先生がいたり、いやあ、実に面白かったですよ、ほんとに（笑）。

———バリケードって言いましたけど、どこら辺を閉鎖した？

（岡原）ええっとね、今も食堂があるところかな、来往舎の少し奥。あそこから当時も語学をやっていた第4校舎、その間をバリケード。

———要は、中庭みたいなところを全部？

（岡原）そうそう、はい、中庭。日吉の中庭のなかで、あその間隔が一番狭いんだよ。そこに椅子と机を立てて並べて（——それで十日間？）、十日間、うん。僕らは、ほぼほぼ泊まり込みで、日夜、見張りの他は、勉強会とかやっていて、さらには羽仁五郎さんを招いての自主講座、このときも右翼が羽仁五郎を誘拐に来るっていう情報が入って、もう羽仁五郎さんを日吉の駅に迎えてから、ぜんぜん違う道でわざわざ、はっはっは（笑）。誰も来ねえのに、はっはっは（笑）。今考えると、本当に学生学生して慌てふためいて、「万が一、もしかしたら……」っていう感じで運営しましたね。一方、羽仁五郎さんは悠然と、そのとき僕らに、「今、森くんが闊ってる」。森くんっていうのは、連合赤軍のあのときのリーダーですね。「森くんの裁判費用が必要なので、今回自主講座でお金は取らないつもりだったけれども、また、みなさん方、ストライキ実行委員がお金を

持ってるわけではないので、それは取らないつもりであったが、カンパをしてくれ」みたいなことを言われたりね。やっぱり話すと、いろいろ思い出すね。「すげえな」と思って。

———すごいですね。ちょうど 20 歳ぐらい？（——僕は 20 歳ですね、うん）。それって、泊まり込みで（——うん）、シャワーとか（——ない）、食事はどうしてたんですか？

（岡原）食事は、いろんなところで買ってきてりゃいい話だから。だけど、これにはオチがあって。このときは、「ストライキで当分、家には帰ってこない」って親に言うわけよ。そしたら母親がですね、「寒いから」。寒くはないんですよ、夏だから（——はっはっは）。「毛布と、あと、みなさんで食べてもらいたい」ということで、おにぎりを何十個も持たせて。うちの親は、そういう親で。「重いじゃねえか」と言いながら、そこはありがたい受け取って、日吉でみんなで食べた。

———それは、いいエピソードですね。お母さんがくれたおにぎり、おいしかったですか？

（岡原）おいしかったと思うよ、多分、ふっふっふ（笑い）。今みたいにコンビニがないからね。

———十日経って……。じゃあ、バリケードを積み上げて封鎖をしたときの気持ちと、それを片付けるときの気持ちって、どんな感じだったんですか？

（岡原）キャンパスの自由化っていうか、それは本当に楽しかったですよ

ね、自分たちがコントロールしてるんだから、それは楽しかった。

で、やめるにあたっては、再度、学生大会を開くんですよ、継続するかどうか。そうしたら、そのときにもう、最初のときはほとんど来なかった体育会のメンバーと、あと、工学部の学生がたくさん来て、工学部の学生はそのとき、「これ以上ストライキが続いて授業が行われないと、実習扱いの単位を得ることができず、自動的に留年する」っていうことなので、でも、こっちはもう、「留年ぐらいなんだ！」っていうのがあった（笑い）。いい加減な、無責任なことしか言わないわけだけど、向こうにとっては大変な話で、それで多数決で、ストライキ中止ということだったんで。

片付けるときは、まあ……悔しい。結局、塾長もなにも出てこないし、なにか出てきたわけじゃない。

途中、右翼の乱入とかいろいろあったけど、やっぱりね、右翼だけじゃないんですよ、他大学の左翼も支援と称して入ってくるわけですよ。「これは別に、左翼の運動ではないから」って、われわれ言うわけで（笑い）。向こうも半分プロだからさ、セミプロみたいな活動家なんで、そういうのを断るのも大変でしたし。

——十日間経って、要は体育会と工学部の学生っていう就活重視組が来て（——多数決で負けたっていう）、キャリアに差し障るから来てるんで、最後はやっぱり十日で終わりと（そういうことです）。面白いですね。すごい面白い話、聞きました。

5. 喜ばしき身体——障害者の自立と岡原社会学の誕生

——そのあと、どうしてボランティアとして障害者支援に入ったのでしょうか。あと、このルートでいうと、本当に文化系というか、そういう

カルチャー系に行くところを、なぜ社会学っていう（——ははは、そうね）、社会の引力みたいなものにからめとられていったのか。今の話も関連するかもしれないけど、社会学との出会いは？

（岡原）ええ、基本はだから、いわゆるカッコ付きだけれども、「社会的弱者」に対してなにかしなくてはいけないっていう思いは、けっこう強かった。それはどういうふうな思いだったのかっていうのは、実は自分で修士論文のときに再考していて、それはカタルシスであったかもしれないっていうのが、修士論文の裏のテーマでもあったんですけど、修論は演劇的行為論で、カタルシスの行為っていうのが現代社会のなかにはあるんだっていうことだった。

それで、けっこう小学生のときから、たとえばピアフラの内戦の悲惨な映像が出てくると、かなり共感して、「なんとかしなくちゃいけない」という思いがすぐ出てくる子どもだったみたいで、それはけっこうずっとあるんだと思う。一方で、自分は恵まれていて、なんの……つらい思いもしないのに、同じ年頃、今だったらガザにしるウクライナもそうですけど、そういった状況に対して「なんとかしなくちゃいけない」という思いはずっと強くある。その意味での社会科学。

あるいは、ストライキ実行委員をしていたように、リベラルもしくはかつての新左翼、左翼的な発想はやっぱり持っていたかな、ずっと。それは塾高のときから、ウェーバーとかマルクスとかで読んでいたので、理論的な柱としてはマルクスってやっぱり思っていたわけですよ。塾高の授業で先生が紹介するわけ、「マックス・ウェーバーという人がいて」と簡単な説明をする、「マルクスという人がいて」。マルクスとウェーバーはもちろん、今も政治経済なんかの教科書に出てくる名前ではあるけど、それをちゃんと原典というか翻訳にまでもっていかせるのは、その教員の力だとは思うよね。「絶対読んでみたほうがいい」と。

それで、経済学部に入った理由っていうのは、やや複雑。中学の頃から親は「絶対医学部だ」って言っている。塾高でも僕の成績は落ちていないんですよ。なので当然、医学部に推薦されてしまうような成績なんで、僕は高校時代にも映画とか演劇、特に演劇を新しく知って、「絶対そっちのほうがいい、やりたい」と言うけども、これはもう全然話にならない。親もぜんぜん、そんなの認めない。さらに担任も、「これだけの成績あるなら、文学部に行くなんて論外である」というふうな話ですよ。それで僕は「専門学校行く」とか、いろいろ口では威勢のいいことを多分言ったと思う。高校辞めて、映画の専門学校みたいなものはもうすでにあったんで、そっちに行くとかね。まあ、本当は演劇だったと思うんだけど。だけど、そうは言ってもそんな勇氣もなく、塾高には残り、で、最後の段階で、どこの学部に行くかっていうところの志望について、僕は文学部、親は医学部。親からすると、悪くても経済学部。元々まあ、息子を慶応に入れるのは、今でいうと財閥系の安定した大企業のところに入ってくれればというふうに思っているんだから、経済学部に行ってくれば、これはもう御の字なわけで、親からすると、なので、その結果、経済学部。

経済学は潰しが利くと言われてるし、とにかくいろんなことができるよというふうにも言われていたんで、経済行っただけですけど、これは面白くないと、授業がね。特に、近代経済学やなんか全く関心を持ってない、ケインズにしろなんにしろ。数理的な統計学も全然関心がないし、面白くないよね。でも、経済学部の科目で自由研究というのがあって、主に日吉で語学を教えている先生が、自分の専門をベースにゼミ形式の授業をする。そのなかで、幾人かの先生が面白かったんですよ。精神科医だったS先生という人と、哲学者のS先生っていう人、そういった先生に出会って、ドイツ語の原著を読むんですが、そういった先生の語り、これが面白かった。さらに、高校時代から文学系のほうが好きなんで、日吉のときはあんまり取らなかったけど、三田に来てからはもう、文学部の専門科目、演劇

関係かな、独文の M 先生、英米文学なら K 先生など、とにかく色々顔を出しました。最後に社会学との出会いですけど、それは語学視聴覚教室のドイツ語授業を担当していたオーストリア人の先生がシュッツ、バーガー、ルックマンを紹介してくれて、その時に読んだ『社会学への招待』ですね。

——同時にですね、大学時代からですかね、国立市でしたっけ（——そうそう、はい）、ボランティアに行かれるわけですけど、出来事の始まりと経緯は、どんな感じだったんですか？

（岡原）それはね、もう経済学部 4 年になるじゃないですか。みんな就職活動を始めるんですけど、「就職活動を僕はしない」と、「企業には就職しない」と、親には宣言した。ここらへんも、僕の親との関係の典型的なものかな……親がこういうふうに言うと、その反対に出る天邪鬼的な反応。医学部進学しないのも、医者になりたくなかったとか、医者が嫌いだったとか、そういうわけではないんだよね。親が強く「しろ」って言うと、「もう絶対嫌だ」っていう。だから、経済学部に入って、普通に会社に入ってほしかったんだろうけど、「それは嫌だ」と思っただけかな。

そういえば、ちょうどリクルートができた頃で、リクルートから経済学部の学生には、とんでもない厚さの電話帳みたいなものが送られてくるわけだ。各企業の詳細な紹介と各企業へのハガキが一緒になっている冊子、慶応だと特定の学部の 4 年生にだけ無料で郵送されてくるという謎の電話帳があって、「なんだ、これは」みたいな。

4 年生のもう 4 月、5 月ぐらいになって、みんな就職活動しているのに僕はしないから、親も心配するわけじゃないですか、「なにやってんだ」みたいな。そんなときに「ドイツに留学する」というふうに言っただけで、「だから、金出せ」って言うわけだからね、親に。もうひどいもんだよ、今

考えたら！ 自分の子供がこうだったら、どうしようかと思うよね、自分の子供には、こういう話、聞かれない！ はっはっは（笑い）、本当に冗談じゃない、でも僕の親が、「本当にやりたいことがあるなら、それでいいや」って、

4年の夏にドイツ留学に向けて、いろんな勉強とか用意をするんだけど、それだけでは、まあね、社会活動を含めてやるべきことはやると、自分に課していたので、朝日新聞の広告みたいな紹介みたいな紙面で、ある団体が学生ボランティアを募っているという記事に目がいった、ボランティアは、山梨県の農協に行って、桃の収穫・箱詰めの手伝いをする、そのときの収入を寄付してもらって、それをベースに高齢者の人が一緒に暮らすホームみたいなもの、今だとグループホームみたいなものを作りたいという団体の記事が載っていて、「これだ」と思って、そのときちょうど体も空いていたってこともあるんだけど、「ちょっと行ってみよう」ということで、行くわけですよ、

そうすると、タコ部屋みたいなところに、他の学生たちと一緒に泊まり込んで、毎日働いて、給料は全部その団体に行くんですけど、ただ奴隷のように働いていたわけではなくて、みんなで飲み食いしながら、いろんな議論をするわけですよ、そのような活動に来ようとしている学生ばかりだったので、関心は一緒だったんですね、今でも友人で、東大の法学部から建設省に入ったH君っていうのと、検事総長にもなったK君、K君も東大の法学部ですけど、タコ部屋にもちゃんと六法全書を持ち込んで勉強して、「すげえな、東大生は」と思ったけど（笑い）、桃の作業もやって、もう僕はヘトヘトになってんのに、「なんでまた勉強するんだ？」と思ったね、Hもそう思ってたみたいだけど、「Kはまだやってんだ？」みたいな、あとは慶応だと、僕の二期下にI君っていうのがいて、彼も経済学部だったんだけど、彼は慶応の経済出てから、長崎大学の医学部に入って、今お医者さんだけど、被爆の問題、原爆の後遺症の問題について、やっぱ

りすごい関心を持っていて、実際に文系の立場でなにかやるよりは理系、「直接医療というかたちに関わりたい」という、その時点でもそう言っていて、卒業後にその道に進んだ。

そういった人たちがいて、議論が弾むというか。なんていうかな、一方でやっぱり、この国の「エリート」にならんとしている位置にいて、だけど、この国の問題を非常に深く、「今のままではだめだ」と言いつつ、でも実際にはそのルートにね、大学を粉碎するというわけではなくて、そのルートにいるみたいな、青春の、なんだ、どっちつかずの蹉跎のような、ジクジクしたようなものを抱えつつも、議論としてはそれぞれ立てられる、そういった人間たちと出会って、すごく面白かったですよね。

さて、その H 君に紹介されたのが東京女子大学のサークルで、障害を持った子どもたちの子ども会でした。桃のボランティアは山梨じゃないですか。帰りがたまたま土曜日だったんですよ、鈍行で帰ってるわけじゃないですか、中央線。で、ちょうどいいくらいに西荻窪に降りるような時間だったの。H が、「半年ぐらい関わっている子ども会、障害を持った子どもとの会に行くけど」と言う。「もしよかったら、来ないか」って言うんで、僕らも西荻で降りて、その時からそのサークルに参加していきます。障害者問題やボランティアにも具体的に関わることに。

そこから今度は『生の技法』につながる自立生活する障害を持った人たちに会おうっていうのは……⁵。さっきの子ども会やなにかのからみで、いろんな勉強会に行ったり、いろんなことをやっている人たちの情報が入ってくるし、関わりができる。そのなかで、東大病院の小児科の先生で I 先生っていうのがいて、I 先生は障害を持った子をいかに障害児として考えずに、逆に言うと、その障害っていうのも社会がつくり上げているものであるということで、小児科の先生をやっていて、その小児科の先生が「医療と教育を考える会」を東大病院でやっていて、そこにも関わるようになります。当時としては、養護学校義務化という国の方針が出された

ばかりで、今まで地域の学校で、いわゆる特殊学級でもなく普通の学級に入ってきて勉強していた障害を持った子どもも全部追い出されるというか、養護学校へ行けという制度だったので、養護学校に行ったほうが専門的な教育を受けられるという話なんですけども、厚生省からすれば、ただこれが、地域の学校を離れて、今まで15分で行けたところが2時間かかるようなところにも行かざるをえなくなって、そういう問題もあって、養護学校義務化反対運動というのも、その「医療と教育を考える会」とのつながりで積極的に関わったってことになります。そうすると、さらにいろんな人たちとの出会いがあって、その後、それが『生の技法』につながる。

『生の技法』に至ったのは、そういった障害を持った人のことには関心があったんだけど、それを学問にするかどうか、という一線を越えたからです。社会学としては、解放社会学会っていうのができたときに、好井裕明とか石川准とかも一緒だったけど、そこでは障害についての議論ってあんまりなかったんですよ。なので、石川、僕と好井の三人で、障害を持った人の社会学をやりましょうということになった。そのときに僕らがとったのは、いわゆる参与観察と呼ばれるもので、障害を持った人が生活しているのに付き添って、そこで話を聞いたり、現場でいろんな経験を自分たち自身がして、それをまとめようっていう方法でした。解放社会学会のなにかを、賞というか、助成金を10万円ほどもらって、それで最初に解放社会学会の第1号の会報というか学会誌にその論文が出てますけど、それが最初になります。

ただそれだと、あまりにもちょっと形式的な議論ばかりでもあるので、もうちょっと違うことをじっくりやろうじゃないかっていうかたちで、今度は石川のとつで、安積純子さんが登場。石川と安積は、マクドナルドがかつて障害を持った人に奨学金を出してアメリカに研修派遣するという制度を持っていたらしいけど、その同期採択者で、飛行機やなん

かでも一緒に話をしていたらしい。その安積さんが、ちょうど福島県から自立生活のために国立市に来たということなので、安積さんから話を聞きましょうということに。最初は僕、石川、好井だけで、ほどなくして立岩が入ってきてって感じ。そうなると、特に自立生活について焦点化しているんなものを調べ、調べる先としては国立市や厚生省などへのインタビューもする感じになりましたね。

———聞きたいことが2点あって、1点目は、西荻窪に降り立って、障害を持つ子どもたちと出会ったときの話です。今まで岡原さんの人生にひとつ、〈身体〉というテーマがあって、コントロールできない爆弾としての自分の身体とか（——はいはい）、あと、プレゼンテーションされる身体（——はいはい）、寺山修司たちを通してですね。なにかそういった〈身体〉の視座から、障害を持ったお子さんたちを見て、出会ったときの彼・彼女らの身体は、岡原さんにとって、どう見え、聞こえ、感じられるものだったのでしょうか。

（岡原）彼らと対面するときに、やっぱり僕は、社会の側にいるわけですよ、大人としてね。そのサークルは、学生サークルだけど、大人のルールというのはある。何時から始めようとかね、いろんな規則があるわけですよ。そういった規則からはみ出るわけですから（——ああ）、たとえば子供だったら、たとえばね、「何時までにあそこに行こうよ」って言うって、障害があってもなくても、なにか面白いものがあったら、そこで寄り道するじゃないですか、そういったことも頻繁にあるわけね。だから、そこでの葛藤がまずあるわけですよ（——ううん）。そのとき、葛藤に気づくんですね、自分が葛藤してるっていうことに気づく。でも、なぜ葛藤しているのかというと、社会的な秩序を重んじて、それに従わせようとしているのではないかっていうふうに、やっぱり考えるわけです（——うんう

ん)。子どもは子どもで、ここで楽しんでいて、それで安全であるならば、それを近くで立って見ているだけでもいいじゃないかっていうふうな考え方が、やっぱり出てくるはず、次は、そこで、子どもの手を引っ張って、あるいは子どもを抱っこして、無理矢理ある決まった時間にキャンパスに連れて行く、みんなと一緒に集団遊びをするっていうふうにしないでいけるかどうかという、そういったことが最初、一番のテーマになったわけですよ。

僕自身は、喘息の身体ゆえに、かなり外れて、外れることで苦しみとか痛みも感じていたことがあるにもかかわらず、障害を持った子どもたちと最初に接したときの僕といえば、社会の側で対応しようとしたということに、まあ、ほどなくして気づくっていう……。それから、それをどう展開するか……というのは、障害を持った人の社会学も含めて、僕の基本になるっていう感じかもしれないですね、それはね。

———2点目の最後の質問は、その話につながっていて、どうしてその〈自立〉っていうものが、そんなに大事だったのか、それは結局、秩序とのからみじゃないですか、自立っていうのは、そこらへんに、自立にフォーカスしていくっていうのは、今までの岡原正幸さんの人生をたどっていくと、なんかすごいよくわかってきた気もするんだけど（——ふふ）。改めて、ここまできて、自立っていうものがすごく、岡原さんにとっても巨大なテーマだったんだっていうのがわかったんで（——そうね）、うん、その点、それにたどり着いた（——はいはい）理由というか（——うん）、〈自立〉のテーマとはなんだったんでしょうか？

（岡原）そう、だから、〈依存と自立〉っていう問題かな。喘息児童の自分は、基本は親や周囲に依存しているわけですよ。その依存のなかで自立しようとしているわけです。たとえば、治療薬をどう自分がコントロールす

るかと、でもそれは、親がコントロールするものとして、親のコントロール下にある。自分は自立しているのかしていないのか…… だけど完全に親元を離れて、その依存を断ち切って自立するかといえば、それはしないってというようなことを、ずっとしてきたわけです。

それで、障害者の自立生活というものに巡り合ったときに、それとは違う突破口っていうか、やりたいことを自分でやるっていう、すごく単純な路線で自立っていうのがつくられているっていうこと、それを知る。さっきの、「喘息の治療薬をちゃんと自分でコントロールしないと、甘えた大人になるよ」みたいな言葉は、近代的な人間観を前提として、自立し、自主的に判断し、理性的にふるまう人間というものが、そもそも規範的に要求されて、それに向けての自立っていう議論なわけですよ。ところがそうじゃなかった、全く。「自分の好きなことを自分でやるというのが自立だ」っていう、全く新しい哲学が実は、障害を持った人の自立生活にあるわけ。だから、自分が賃労働しなくても全然いいわけです。自分の食いつちを自分で稼ぐなんて、そんなもん、全く自立には関係ないっていうこと。

あるいは、近代社会における〈当たり前さ〉みたいなもの、それを担保にしているような制度としての病院であるとか、学校であるとか、そういったものね、そういったものに対して、自立生活する障害者はやっぱり、「本当にそうなのですか？」って突きつける。「それでは、われわれの自立にはなっていない」。好きなことをやりたいという自分の自立からすると、治療だと称して、毎週必ず入院に近いかたちで病院に行って、かなり肉体的苦痛を伴うリハビリをさせられる。これは、近代社会のなかでは、自分で歩ける存在が自立する人間であって、病院はそれに向けて、かなり無理を個人に強いてまで治療しなくてはいけないと考えている。多くの自立生活する障害者も、子ども時代にそういうことに直面させられているわけですよ。当事者研究の熊谷晋一郎さんも言うとおりの、そういうふうな苦痛を受けていたわけで、身体的にも、そうではなく、もっと自分がやりたいこ

とを、自分の快樂を求めていいんだっていう、それが自立になるんだっていう考え。その意味では、同じ自立と言っても、全く正反対に向けられた自立というものを、そこで発見したっていうのが正しいかもしれないですね。僕としても、それまで言われてきた自立、あるいは自主的な個人、大人にならなくちゃいけないとかいうものとは、ちょっと違うかたちの自立をそこで発見する。

そんなこんなで、その後の教育活動においても結局、一番大事なのは、「欲望」というふうな言葉でもって語っているけど、「学生の欲望はどこにあるんだ」ということ。学生の欲望があるならば、それを殺さないで、いかに教育というか、授業が成立するのかっていうこと（——うんうん）。結局のところ、ずっとやってきているのは、そういうことなんですよ。『ホモ・アフェクトス』の副題は「感情社会学的に自己表現する」ですけど、学問や研究が自己表現であるのは、そこにある欲望に素直だからですね。だから、学生たちの欲望も否定しない。

——あれですね……障害を持つ方たちの自立にふれるなかで、岡原さん自身もすごく楽になったっていうか、ねえ。

（岡原）そういうことですよ、うん。

——その楽になった、その気持ちって、すごく、普通部に入ったときの、あの解放感とすごく似てるなと思ったんですけど。

（岡原）まあ、そうかもしれないよね。うん、そうね、そうね、さすが（笑い）、ふふふ。

——そこにやっぱり……うん、居心地のよさを覚えたみたい（——

そうだと思う、うん)。逆にすごくエンパワーされるものもあったんだなというのが、非常によくわかりました。

(岡原) そういうことですね。エンパワーされるっていうね。うん、それだよ、それ！(笑い)。

おわりに——謝辞に代えて

岡原先生はどこから来たのか——？

それは私たち弟子にとって、大きな謎であった。高い知性を持ちながら、常にその身体は躍動に震えていて、隣人にはめっぽう優しい。エリートでありながら、不条理な秩序に対する最大の反逆者。そのふるまいには権威主義的なところが一切なく、むしろ若木のように伸び縮みするしなやかさと、駆けぬける欲びで溢れている。

いったい、どんな時代の、どんな環境であれば、このような人が育つのか——？

それは人間学的な興味であるとともに、社会学的な探究課題にも思われた。その答えの一端を、ご本人自らが快くインタビューに応じることで開示くださったことは、望外の喜びであった。

岡原先生のライフストーリーは、〈自立〉と〈共生〉が二律背反やトレードオフでは決してなく、相補的な相互作用の関係にあることを私たちに教えている。そしてそれこそが即ち、社会学の根源的な教えであり、慶應義塾の根幹の教えであることは、驚くべきことだ。

一人ひとりの身体が独立自尊して自由にふるまえばふるまうほど、ひとつの喜ばしい社会秩序がそれらの相互行為の達成として実現され、真に実りある共生の仕組みをもたらすこと——アダム・スミスや福澤諭吉がつか

み出した近代社会のこの最良の部分（それは近代それ自身を批判し乗り越えるための近代的理念でもある）を、岡原先生は自らの身体と他者との関係性において、私たちに示してくれた。その〈しるし〉は私にとって、肯定となり、自信となり、己を生かし他者を生かすすべ、すなわち生きる力となった。

これほど幸せな弟子がいるだろうか——？

僕が岡原さんから受けとったのは、歓びや喜び、歓喜の肯定なのである。岡原さんの人生には辛い出来事もあった。しかし僕はいつも、〈喜ぶ岡原さん〉や〈笑う岡原さん〉を隣で感じていた。どんなに深い悲しみがあろうとも、彼の根底には生の肯定があった。「いま生きていることは奇跡なのだから、生きることの歓びを共に分かち合おうではないか」、そう語る彼の存在、あるいは共存在の声が、たしかに僕には聴こえていたのだ。だからこそ彼は、人生をこの日まで生きてこられたのではないかと。生きることを喜び祝う、〈歓喜の肯定者〉こそが岡原正幸、その人である。

岡原先生との出会いに、心から感謝申し上げます。

註

- ¹ 岡原正幸編著『感情を生きる——パフォーマティブ社会学へ』（慶應義塾大学出版会、2014年）。
- ² 岡原さんによれば、「減感作療法」とは当時のアレルギー喘息の治療法の一つであり、感作する力を落とすために、卵やブタクサなどのアレルゲンのエキスを最初は週に2回程注射し、アレルゲンを体に慣らししていくというものである。岡原さんは、小学校2年時から中学校卒業頃まで、この治療を続けていたという。
- ³ 『黒板とワイン——もう一つの学び場「三田の家」』（慶應義塾大学出版会、2010年）に詳しい。
- ⁴ 「ある十五歳の少年が書いた詩」として、『SOCIETY』と題された以下の詩が掲

載されている（岡原正幸『ホモ・アフェクトス——感情社会的に自己表現する』世界思想社，1998 年，13-14 頁）。「今日からおまえもここの一員だ，おまえに教えてやろう，ここの規則を，いい耳の穴をよくほじって聞いておけ，ここの規則を。／まずおまえの父を殺し，母を殺し，そのはらわたを口にふくめ。つぎに，おまえの師を欺き，友を欺き，大きな声でののしってやれ。他人にたいしても同じこと。……〔中略〕……いいかもう一度言ってやる，これが規則だ，SOCIETY の」。

⁵ 安積純子・岡原正幸・尾中文哉・立岩真也『生の技法——家と施設を出て暮らす障害者の社会学』（藤原書店，1995 年）。